

Ⅳ 関係資料

■教育課程表

別紙様式1 学校番号(4)

平成27年度教育課程表 熊本県立第二高等学校 全日制

学 科	入 学 年 度	平 成 2 7 年 度 現 在 学 年	平 成 2 5 年 度 入 学	計
教科 科 目	1	Ⅱ	Ⅲ	計
国語総合	4	4		4
現代文B	4		2	4
古典A	2			
古典B	4		2	4
世界史A	2		2	2
世界史B	4			0,4
日本史A	2			0,2
日本史B	4		2	0,4
地理A	2			0,2
地理B	4		4	0,4
現代社会	2	2		2
倫理	2			0,4
政治・経済	2			0,4
保健体育	7~8	2	3	7
保健	2	1	1	2
音楽Ⅰ	2			0,2
音楽Ⅱ	2			
音楽Ⅲ	2			
美術Ⅰ	2	2		0,2
美術Ⅱ	2			
美術Ⅲ	2			
書道Ⅰ	2			0,2
書道Ⅱ	2			
書道Ⅲ	2			
外国語総合	3	3		3
外国語総合Ⅱ	4		3	3
外国語総合Ⅲ	4		3	3
英語表現Ⅰ	2			
英語表現Ⅱ	4		2	4
科学英語	2	2		2
家庭基礎	2			
科学家庭	2	2		2
情報の科学	2			
科学情報	2	2		2
普通教科計	20	16	16	52
理数数学Ⅰ	5~8	6		6
理数数学Ⅱ	9~14		4	4
理数数学特論	3~6		2	2
理数物理	3~12		4	4,9
理数化学	3~12		4	4
理数生物	3~12	4		0,4,9
理数地学	3~12			0,4,9
課題研究	2~4	1	1	2
スーパーサイエンスⅠ	1	1		1
スーパーサイエンスⅡ	1		1	1
スーパーサイエンスⅢ	1		1	1
専門教科計	12	16	16	44
特活ホームルーム活動	1	1	1	3
総合二高ブレイクアップ	3~6			
合 計	33	33	33	99

※学校設定科目「科学家庭」、「科学情報」、「スーパーサイエンス」(Ⅰ～Ⅲ)の履修をもって、それぞれ「家庭基礎」、「情報の科学」、「総合的な学習の時間」における学習活動を代替する。
※「科学美術」は学校設定科目である。

別紙様式1 学校番号(4)

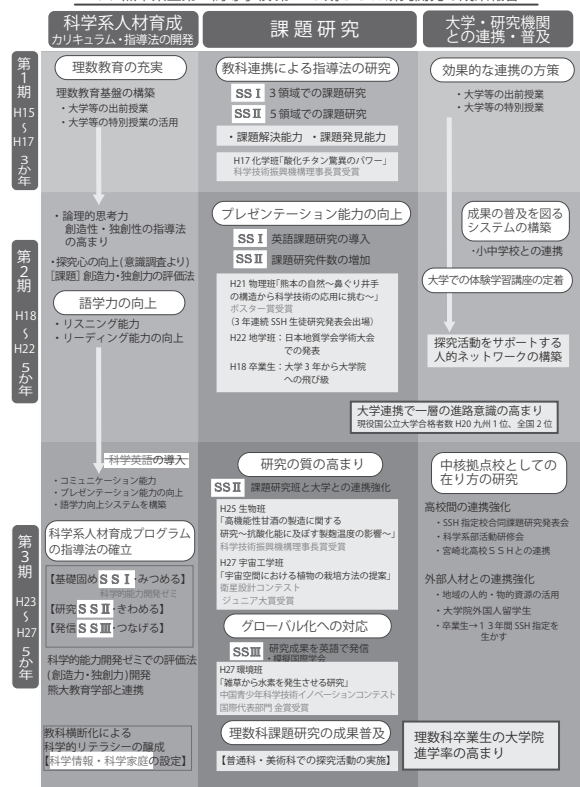
平成27年度教育課程表 熊本県立第二高等学校 全日制

学 科	入 学 年 度	平 成 2 7 年 度 現 在 学 年	平 成 2 6 年 度 入 学	計
教科 科 目	1	Ⅱ	Ⅲ	計
国語総合	4	4		4
現代文B	4		2	4
古典A	2			
古典B	4		2	4
世界史A	2		2	2
世界史B	4			0,4
日本史A	2			0,2
日本史B	4		2	0,4
地理A	2			0,2
地理B	4		4	0,4
現代社会	2	2		2
倫理	2			0,4
政治・経済	2			0,4
保健体育	7~8	2	3	7
保健	2	1	1	2
音楽Ⅰ	2			0,2
音楽Ⅱ	2			
音楽Ⅲ	2			
美術Ⅰ	2	2		0,2
美術Ⅱ	2			
美術Ⅲ	2			
書道Ⅰ	2			0,2
書道Ⅱ	2			
書道Ⅲ	2			
外国語総合	3	3		3
外国語総合Ⅱ	4		3	3
外国語総合Ⅲ	4		3	3
英語表現Ⅰ	2			
英語表現Ⅱ	4		2	4
科学英語	2	2		2
家庭基礎	2			
科学家庭	2	2		2
情報の科学	2			
科学情報	2	2		2
普通教科計	20	16	16	52
理数数学Ⅰ	5~8	6		6
理数数学Ⅱ	9~14		4	4
理数数学特論	3~6		2	2
理数物理	3~12		4	4,9
理数化学	3~12		4	4
理数生物	3~12	4		0,4,9
理数地学	3~12			0,4,9
課題研究	2~4	1	1	2
スーパーサイエンスⅠ	1	1		1
スーパーサイエンスⅡ	1		1	1
スーパーサイエンスⅢ	1		1	1
専門教科計	12	16	16	44
特活ホームルーム活動	1	1	1	3
総合二高ブレイクアップ	3~6			
合 計	33	33	33	99

※学校設定科目「科学家庭」、「科学情報」、「スーパーサイエンス」(Ⅰ～Ⅲ)の履修をもって、それぞれ「家庭基礎」、「情報の科学」、「総合的な学習の時間」における学習活動を代替する。
※「科学美術」は学校設定科目である。

■13年間の第二高SSHの成果

添付資料1 熊本県立第二高等学校 第1~3期SSH研究開発の成果報告



熊本県立第二高等学校スーパーサイエンス ハイスクール第9回運営指導委員会

■趣旨

スーパーサイエンスハイスクールとして指定を受けた熊本県立第二高等学校の研究運営に関し、専門的見地から指導、助言、評価を行い、理数系教育に関する教育課程等の改善のための研究開発を支援する。

■主催 熊本県教育委員会

■期日 平成27年7月24日(金)

■会場 熊本県立第二高等学校セミナーハウス

■出席者

運営指導委員

元熊本大学長

熊本県立大学環境共生学部 名誉教授

ソニーセミコンダクタ株式会社

熊本テクノロジーセンター

人事部人材開発課 SSS 推進担当

熊本大学教育学部 教授

崇城大学工学部ナノサイエンス学科 教授

県立教育センター 主幹

熊本県教育庁関係職員

高校教育課 審議員

高校教育課 主幹

高校教育課 指導主事

熊本県立第二高等学校関係職員

谷口 功

篠原 亮太

大脇 光一

島谷 浩

八田 泰三

赤峯 達雄

松永 健身

田中 篤

原 恭一

■日程

(1) 受付 9:45 ~ 10:00

(2) 運営指導委員会開会 10:00 ~ 10:10

(3) 第二高校からの報告 10:10 ~ 10:25

「平成27年度SSH事業計画について」

(4) 第二高校からの報告に関する協議 10:25 ~ 10:45

(5) 研究協議 10:55 ~ 11:50

「第4期SSH指定申請内容について」

(6) 閉会 11:50 ~ 12:00

【研究協議内容】

(谷口委員)

第四期に向けて、申請の骨格を今、ご説明いただいて、「みつめる・きわめる・つなげる」、第二高校がSSHの中でやってこられた学習の基本のところをベースにしながら、テーマとして、防災・減災とありますけど、「熊本を世界一安全な都市」としてテーマにしながら、申請をしたらどうかという方向のご説明でございました。第四期ですから第三期までの活動をベースにしながら、そこでできたことをさらに発展させなければなりません。皆さん方の中からご意見を出していただければありがたいと思います。

(篠原委員)

今のお話の中で、違和感を感じました。急に防災・減災の話が出てきたので。今までの研究課題ではなくて、研究の内容との関連性というのが。今までの13年間やってきた集大成ですから、その話を長く溝を埋めないと、多分審査員は「あれ？」という感じになると思います。「今までこういうことやってきたので最終的にはこうします」ということが必要ではないかと考えます。

(島谷委員)

英語のことにに関して触れさせて頂きたいと思いますが、世界に発信できるような、英語のコミュニケーション能力といえますか、そういう独創的な研究を世界に発信できるということ、目標に掲げていただけると良いと思います。まあ十分、できています。どちらかというと内よりなので、それを世界的に広げるような形で英語というものを使って発表する。今までの実施報告書では、語学力という言葉が使われておられますが、英語コミュニケーション能力とか、英語プレゼンテーション能力という言葉をもっとはっきりだされてもいいのではないかと思います。

(八田委員)

質問をしたいことがありまして、第四期の申請にあたり、13年を振り返ってみて、何が第二高校として売りになってきたかというところを一つ。それと、逆に反省点としてこれはちょっと・・・というところもおありになると思います。その二つをちょっと簡単に教えていただいてもいいですか。

(福田)

本校SSHの一番の成果は、課題研究になると思います。全国規模のSSH生徒研究発表会において平成25年では、科学技術振興機構理事長賞受賞、そして昨年度が、ポスター発表賞を受賞しました。他校ではそこに出てくる発表のほとんどが科学系部活動の発表であり、研究に時間をかけているところが多いです。第二高校の場合は、週2時間と、休日、長期休業中も使いますが、短い時間で生徒たちが研究の力を身につけて発表の場に向かっていくことが一番の13年間の成果と考えます。反省点は、主対象が理数科でありましたので、成果の普及が全校に難しかったこと、それと、SSHに係る先生も理数科目の先生になりがちであったということです。

(八田委員)

次の申請に向かっては、やはり全校的にどのように広がるかというところが一番ポイントになると思います。あと授業改善の手法として、アクティブ・ラーニングをどうやって取り入れていくかということです。私自身も講義をしていて、とりいれやすい環境、とりいれにくい環境があります。基礎知識を注入する部分は必ず必要になってきます。

(大脇委員)

アクティブ・ラーニングを導入することは大前提になってきます。アクティブ・ラーニングは生徒が変わらないといけません。自分から発信する。であれば、先生がどう変わるか、先生も変わらないといけません。授業も変わらないといけません。先生が生徒から引き出すということになれば聞く耳を持たないといけません。アクティブ・リスニングという感じ。もどかしい感もありますが、聞く耳をどう作るか、アクティブ・リスニング、その後、生徒たちをどうまとめ上げていくか、ファシリテーションズ、これを見つけたらいいと思います。

(赤峯委員)

SSHは「こんな人材を育てるとか、こんな人材を育てるための仕組みを作る」それが基本的に研究に使う開発課題となります。だからこれを防災・減災ということで見ると防災・減災に対応できるような人材を育成するとか、そのような人材を育成するカリキュラムの開発をするという話になる。そうすると、SSHが狙っている創造的人材の育成の観点が限定されるような気がします。ほかの委員の方もおっしゃっていましたが13年間という、その積み重ねたものが、第二高校の宝物だと思います。その中で蓄えてきた研究の成果、要するに試行錯誤ですよね。どんな試行錯誤をして、どのような今に至っているのかということもしっかりと整理をして、それをベースにした上で新たな基軸を出すという形が多分一歩説得力があると思います。課題研究については成果が上がっているところですね、アクティブ・ラーニングという方向性も私はこれでいいと思います。ただ、アクティブ・ラーニングを全面に持ってきた場合に国が進めていますので、先進校はたくさんあります。そうすると先進校の後に続く形になり研究開発をするSSHの立場としては少し弱いかなと思います。ですからアクティブ・ラーニングなり、何らかの第二高校SSHならではの特徴づけ、あるいは開発研究する視点を付け加えてもらおうと良いのではと思います。

(谷口委員)

他校SSHとの違いをどう出すのか。熊本の防災・減災、地域の課題を出せばそれが特徴となる。そのような意味での提案であったかと思います。熊本の特徴を生かした研究内容で人材育成をしていく、教育課程を作っていく。環境などに目を向ければもっと広い視点での人材育成になります。あと、第二高校の特徴として、生徒のレベルが高い。活躍されている卒業生の皆さんもたくさんいらっしゃいます。その卒業生も紹介しながら成果をまとめていかれると説得力がでると思います。